フィールドワーク
見る・聞く・歩く

最前線

山田 勇編——京大探検部が誇る15人の精鋭たち

日本の学生，モンゴルに行く！
——日本の子どもがうちに来た！——

風戸真理

今年の夏はどうしてもモンゴルだった。新聞を開けば，「草原の国モンゴル」へのパッケージツアー広告がほら，こんなに。旅行社に30万円をポンと渡せば，１週間だけ草原の別世界へワープできる。しかし，世界一の経済大国日本から毎日毎日やってくる学者・旅行者・ボランティアーの群を横目に，モンゴル人はみんな，家畜と一緒に，つつましくもあたたかな，チンギス・ハーン時代と変わらぬ生活をしているのだろうか。本屋にずらりと並ぶモンゴル関係の本は，大家族が家畜と共に暮らす眩しい遊牧世界の魅力をチラつかせて私をモンゴルへといざなう。1992年に生まれ変わった「モンゴル国」の今，を自分の目で見たい。自分の手でさわりたい。自分の体で挑戦したい。

◎ モンゴルの草原にいきたい！

モンゴルに近づく

さて，どうやったら草原の遊牧家族に接近できるだろう。私は，日本全国で最近どんどん増えている「日本・モンゴル○○協会」や大学の留学生係をいくつもたずねてモンゴル人を探した。それで，首都ウランバートルからきているナランさん（仮名）を紹介された。早速，彼女の職

場をたずね，私が文化人類学にかぶれてモンゴルの遊牧生活に思いを馳せる学生であることを告げて助けを求めた。何度かお願いするちに，「草原に行きたいとは困ったわねー。でも，あんたみたいに小さい女の子が（注：私は当時21歳）一人でモンゴルに行くなんて，あんたのお母さんの気持ちを考えると放っておけないわ。モンゴルは今，経済が混乱していて危険だから，ウランバートルにいる私の姉に頼んで絶対に間違いなくあんたが旅行できるように何とかしてみる。だけど，今のモンゴルの生活は，安月給にインフレでとても厳しいから，草原に行く車のガソリン代や食事代は払ってね」と，ウランバートルでの生活と草原の遊牧戸での生活とを約束してくれた。やったあ！　遊牧家族のところでホームステイできるぞ。私は2か月前まで東欧にいたので，市場経済に変わったばかりの国々の経済のメチャクチャさは体感済みのつもりだった。旅行者には嬉しいかなり異常な安物価だが，生活者の収入の低さとインフレの激しさはもっと異常だ。

出発の前日，最後の打ち合わせのためにナランさんの家に行った。最初の1週間はウランバートルの観光，次の2週間は草原の遊牧民の天幕に居候，最後の1週間を町での資料収集に，という1か月の予定が決まった。町では妹のアリゲルマー宅に泊まり，草原については地方公務員をやっている弟のダムディンスレンの知り合いの牧民に頼むということだった。ナランさんは言った。「で，1泊35ドルね。ガソリン代は1キロ1ドル。運転手の日給はインフレで毎日変わるから，妹に聞いて。」私は耳を疑った。でも，耳は正しかった。モタモタと頭のなかで計算すると，1ドルは110円ぐらいなので，35ドルが1か月分で10万円。車代が5万円。この調子で行くと運転手代をあわせると20万円ちかくになる！「ナランさん，私は学生です。そんなにお金がないです。」こぼれそうになる涙をこらえて訴えたが，「モンゴル人もお金がないのよ」と一蹴された。

確かに，モンゴル人はお金がなくなってしまった。彼らは，数年前までは雇用と福祉の整った「モンゴル人民共和国」の労働者として，都市でも草原でもちゃんと仕事があって，ちゃんと生活が保障されていた。しかし，「民主化」以降，牧民，公務員，工場労働者，すべての生活者がはじめのきかない市場経済化の渦に巻き込まれ，物価は刻一刻と上がるのに給料支払いは滞り，誰もがどうにかしないと生きていけない世の中になってしまった。

とはいえ，私も，どうしよう。長い道のりを重い足どりで下宿に向かい，悶々としていた。そこへ友だちが酒をもって現れた。またもう一人，夕食を作りにやってきた。ああ，友だちってなんてありがたいもの！私は，友人に囲まれてカパカパ飲んで，金のことなどどうでもいい気分になってきた。けれども，だんだん醒めてくると，私の20万円を首を長くして待っているナラン一族の存在感が迫りきた。恐ろしくなって，モンゴルに詳しい先生に電話をかけてヘナヘナと助けを乞うた。「あなた学生でお金ないんでしょ。ないものはないんだから，そう言いなさい。取りようがないじゃない。それに，彼らはビジネスとしてやってるんだから，代金以外におみやげとか一切不要で，一回限りの関係としてやりたいことやればいい。」先生は強く，偉大だった。旅先で困ったら相談するようにと日本語の話せる友人も紹介してくれた。私はかなり立ち直って，布団にはいった。

私のモンゴル　はじまり，はじまり

1994年7月31日，夜9時，名古屋からのチャーター便がウランバートルの空港に着陸。80人の団体客に混じって税関を通過すると，ナランさんの妹アリゲルマーと，つれあいのバトが，この国では貴重な車持ちの友人と一緒に迎えにきていた。

私を乗せたオンボロ車はトロトロと市街へ向かう。市街の中心をぬけ

ると，車は団地に入り，一棟の前で止まった。建物に一歩踏み込むと，ムワワワッと乳臭い。アルバイトしている保育園の比じゃない。4階まで昇る階段に電気はなく，手探りで進む。懐中電灯で照らされたアリゲルマーの家は2重扉で，鍵が三つもついている。一瞬，モスクワの団地でマフィアに押し入られた時の記憶が脳裏をよぎった。でも扉を開けば，あたたかいモンゴルの家庭に，おじゃましまーす。室内には大作りな家具が整然と並び，それ以外のモノは見あたらない。さあ，生まれて初めてのモンゴル語会話実践編がはじまった。アノ，ソノ……挨拶や自己紹介をしあっているうちに，バトが「ほら，食べなさい」と蒸し立ての小肉まん「ボーズ」を運んできた。彼は熱々の「ボーズ」をほおばりながら，古ぼけた『蒙日会話集』をめくって，「ドウモアリガトー。キテクレテ，ドウモアリガトー」と言った。ゾッとした。「命は金よりも軽し。」モスクワで覚えて以来，私はこれに憑かれている。

翌朝，日焼けで真っ黒な19歳の青年ベヘーがやってきた。バトが，「私の息子だ。英語が話せる」といって紹介した。「ベヘーと一緒にバスに乗って博物館に行きなさい。美術館にも，ガンダン寺にも，展望台にも行きなさい。そうだ，日本のパパとママが心配しているだろう。電話局に行って国際電話もかけなさい」と，バトはパッケージツアーをくんでくれた。私は，この「通訳ガイド」を雇うことになったからには，5日間の首都滞在中，徹底的にこれを活用した。ツアー中のバス代，アイス代，博物館の入場料，はては日本の両親への電報代までも，「後でお父さんに請求してね。」と言って，ベヘーにお願いした。600円の電報代はすごい値段だ。電話よりも電報のほうがずっと安かったが，それでも2円40銭で手紙の出せる国では。ベヘーはちょっと悲しい顔をした。私もちょっとゆらいだ。

彼は美大の学生だった。彼のたどたどしい英語とわたしのたどたどしい蒙・露語との協力の結果，ベヘーが「なんだかいいヤツ」だというこ

とがわかってきた。美大の学生たちは，小遣い稼ぎに，いかにもモンゴルっぽい草原の水彩画を描いて観光スポットで売っている。1枚20分位でステレオタイプな絵を大量生産するだけで，日本人をはじめとする外国人観光客が1枚3ドルで買っていくという。ものすごくいい商売だ。平均月収が35ドルの国で。

数日間，楽しく「観光客」をしていたが，お金の話はまだない。気になる。ナランさんは日本物価できたが，もしかしたらウランバートルの人たちは1泊10ドルとかいわないかしら。アリゲルマーに聞いてみた。「一泊，いくら？」「35ドルよ。」ありゃー，連絡はしっかりついている。困ったなあ。持ち金は全然足りない。先生の友人を頼って助けてもらうしかない。電話をかけてあたふたと苦境を訴えると，おだやかな日本語で，「モンゴルはどうですか」といわれて，恥ずかしくなった。次の日，彼はアリゲルマーの家に来てくれた。よもやま話が一通り済むと，私に，「モンゴルの生活も大変なんですよ」といった。そして，アリゲルマー，バトと30分ほど楽しげに話しているかと思ったら，突然，「ほかの遊牧家族のところへ行けるように，私の友人に聞いてみます。彼らは大丈夫です。いい人です。ダメだったらしかたないですね。この人たちに頼んで下さい。じゃあ，さようなら」と言い残して，帰っていった。「それで……」と切り出したバトが，ディスカウント価格を提示してきた。独占価格体制崩壊の危機を察知したのだろうか。ウランバートルのかれらの家では1泊25ドル。車代が全部で150ドル。草原での生活が1泊20ドルで，10日で200ドル，ということだった。すると，なんというタイミング！　日本のナランさんから，電話だ。私がかわると，受話器の向こうでナランさんの声が怒りにふるえている。「35ドルって言ったでしょう。車代だって150ドルだなんて！　まずしい姉さんに自腹切らせるつもり？」

翌日，バトの提案をありがたく受けることに決めて，1ドル紙幣だら

けで分厚い札束を渡して「お願いします」といった。契約締結の立ち会いに来ていたアリゲルマーのもうひとりの弟に，「領収書を書いて」とフィールドノートを開いて差し出した。彼はイヒヒヒーと笑って，「パパとママに見せるのか」といった。みんながどっと笑った。それでも，「町での５日間の食事やバス，観光，宿泊，全部あわせて125ドル。草原の９日間は車代と生活費とで，250ドル」とサイン入りの領収書を書いてくれた。

ところで，アリゲルマーの親戚のいなかに９日間滞在した後，私はゴビ砂漠にいくつもりだった。ラクダのいるゴビ砂漠のまんなかに農牧省の研究所があって，そこには日本人研究者がいた。彼と15日に約束して，そのこともバトに頼んであった。バトは「明日，草原の遊牧家族におまえを預けて，14日に迎えにいく。15日には，ウランバートルから研究所に行く人がいると聞いたから，一緒に行けるよう農牧省に問い合わせてみる。それから，ゴビへの飛行機の切符の手配もしておくよ」と言った。ああ，嬉しい。なんて親切。客のわがままをこんなに聞き入れてくれる旅行社は，日本にだってめったにない。モンゴルで一日のムダもなくコトがすすむなんて，想像すらしていなかった。去年の夏，中央アジアのウズベキスタンとキルギスタンに行こうとしてモスクワで準備していた時は，ロシア民謡の「一週間の歌（月曜日は市場へ出かけ…テュラテュラテュラ…）」そのままの日々だった。一日目，航空券売場に行くが，行列しているうちに営業時間が終わる。２日目，朝一番に並んで，やっと順番が来たと思ったら，「国内線（旧ソ連の）は扱っていない。地下鉄で数駅先の売場へ行け」と言われる。３日目，やっと正しい窓口にたどりつくが，今週の便は満席で，次の便は10日後であることを知る。４日目，仕方なく鉄道にあたるが，これも一週間後だとわかる。それでやっと，10日先の航空券を握りしめる，という具合だ。あのとき，これが夢にまで見た社会主義国のかたちね，と思った。私はかつて，ソ連に行き

たくていきたくて，モスクワでパンを買う行列に並ぶ夢を見た。昨夏，５日かけて自力で得た「キルギスタンへの片道切符」は確かに安かった。でも，この５日間に堪能するべきどうしようもなくがっかりな気持ち，無力感，屈辱感，忍耐，そして諦念，これらすべてを今回は，お金でポーンとスキップした。

草原へ

７月６日，朝，バトの友人の車で出発。町を一歩でると，丘をいくつ越えてもいちめん緑の草っぱら。草原での暮らしがはじまるのだ。私はウキウキの絶頂で楽しい想像が際限なく広がる。はなしに聞くように，大歓迎されるかしら？　どんなごちそうかしら？　そして，10日たったら砂漠とラクダだ。あとのことはバトが準備してくれる。心配ない。さあ，草原の暮らしにどっぷり浸ろう。

でこぼこの道を６時間も走ると，ほこりにまみれたコンクリートの建て物がいくつか立っているのが見えてきた。とある郡の中心地である。ナランさんの弟で，ここで公務員をやっているダムディンスレンの知り合いの牧戸に私は世話になるらしい。お！　金だらいいっぱいにでてきたのはヒツジの内臓の水煮だ。大腸には血が詰まっていて，小腸には胃の細切りテープと食道が詰めてある。みんな，たらいを回してじゃんじゃん食べる。

翌朝，ダムディンスレン一家を加えてはちきれそうなワゴン車が草原に出発。未舗装のデコボコ県道を少し走ると，六つのゲル（モンゴルの移動式天幕型住居）からなる集落に止まる。こんな郡中心の目と鼻の先に私は預けられるのかしら？　でも，歩いて店まで行ける距離だ。もっと本物のいなかに行きたい！　あら，ここはただの食堂でした。これはゴアンズといって，郡中心や県道沿いに牧民がゲルをたてて自家製の乳製品や肉をつかった料理を食べさせる。また車に乗って10分も進むと三

つのゲルが集まっているところでまた下車。ここか？　私の滞在する家は。バトたちはまるで自分の家みたいにすたすたとゲルにはいっていく。しかし，馬乳酒，生クリーム付き干しチーズをごちそうになるや，さっさと車に戻っていく。ここではない。私はどうなるの……。今度は立派な家。ゲルにはいると，朱地に色とりどりのモンゴルの模様のついた新しい家具がそろっている。それに，この家の女の子たちの服はどこの子よりもきれいで新しくておしゃれ。こんなにきれいなゲルにであうのは最初で最後かもしれない。アリゲルマーに聞いてみた。「ねえ，アリゲルマーさん，写真とってもいい？」「あーら，ここに9日間すむのよ。こちらが，お父さんのボヤント。」わあ，こんなきれいな家で，しかも女の子がたくさんいる家族のところにいられるなんて！　だけど，この，髭にも服にもまったく頓着しないで，朝から酒を飲んでいた中年のおっさんが，白ブラウスにジーンズのあの娘の父親だったなんて……。

◎ 草原生活，はじめの一歩

はじめての草原生活

彼らが私を置いて去っていくと，世界は急に静まり返った。正午――太陽がギラギラ照りつける時間だ。牧民家族は何をするでもなくダラダラしている。手持ちぶさたなので，娘たちの名前，年齢を聞いてメモするが，5人姉妹は全員ほっぺがまっ赤っか。区別がつかない。彼らは，私がもって歩く辞書とノートの束を珍しそうにめくってみるが，私に何を聞くでもない。突然，17歳の青年が「中国語で数を教えて」と言う。「私は日本人。中国人じゃないよ。」「わかってるよ。でも，教えてよ。」多くの日本人も，モンゴル人が中国語をしゃべっていると信じているのだから，これもしょうがない。

歓迎の雰囲気は少しもない。はなしに聞いていたのと全然違う。迷惑なのかしら。そりゃそうだ。勝手におしかけてきたのはこっちだ。私は世界地図を拡げて「ココ」と選べばソコに行ける。でも，モンゴルの遊牧民は行き先どころか，来るやつも選べない。多分，この一家も，日本からこんな子どもが……来てしまったんだからしかたない，と思ってひきとったのだ。

この家では，私がいてもいなくてもちっとも変わらぬ毎日が続いているようだ。特別なことはなにも起こらない。私がお客様扱いされたのは，最初の3日間，私のごはんが一番はじめに盛られた時だけだった。そのかわり，自由だった。私は，馬に乗っての遠出以外はどこへでもくっついて行った。そばでじっと見ていたり，フィールドノートに書き込んだり，写真を撮ったり，五感を駆使して草原の生活をならい覚える。そして，一度ついていった仕事には，2回目からは呼ばれていって，少しずつ手伝いの仕事が割り当てられた。

私はモンゴルの家族と子どものことを卒業論文にしようと思っていたので，今回の草原行きは卒論のための予備調査であった。ある日，家族の労働に関するデータをとるため個体観察を試みて，朝からお姉さんについて歩いていた。「12時2分，赤ん坊の授乳中，おしめの洗濯を13歳の妹に命じる。」時間軸に沿ってすべての行動をもらさずノートに書きつける。突然，「マリ！　牛の糞拾いに行っといで。」おばあちゃんのいいつけだ。牛の糞は燃料としていつも必要で，毎日誰かが取りに行かなければならない。モンゴルでは，年長者のいいつけに「待って」は言えない。でも，私は卒論のための予備調査に来ているはずだ。糞拾いに行けば1時間はかかる。その間のお姉さんの行動データはすっぽり欠落してしまうだろう。しかも，糞拾いは全身ぶくぶくに虫さされになるイヤな仕事だ。私は1泊20ドル払って泊まっているんだ。食費は町で外食しても1日3ドルあれば十分だ。働く義理はない。だけどやっぱり私は10

歳の妹と一緒に糞拾いに行った。この家族が「生活費200ドル」を受け取ってはいないような気がしていた。

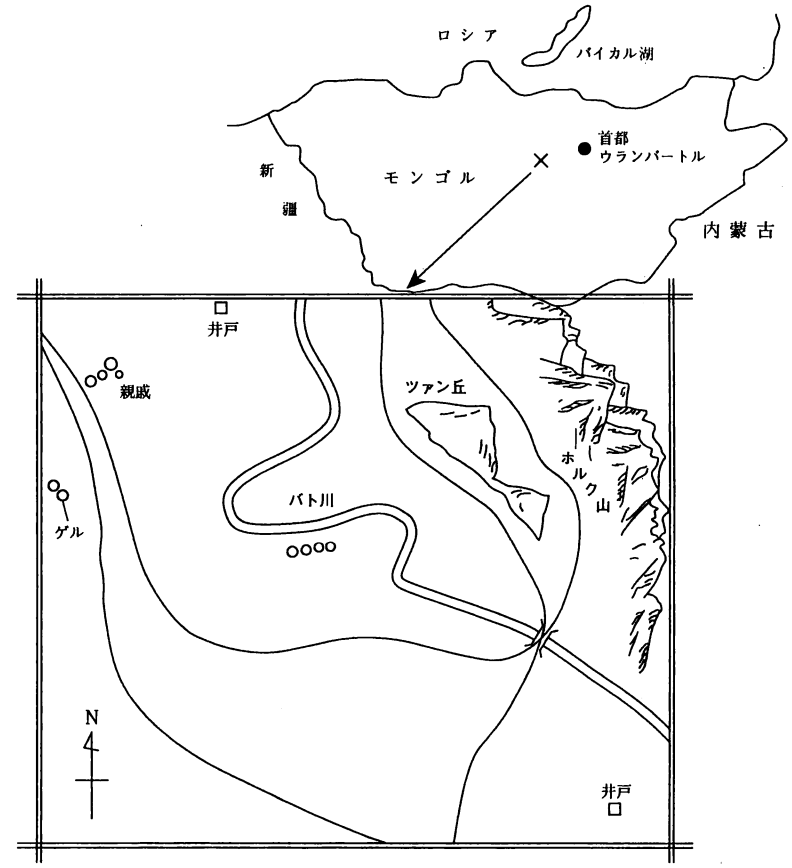
「来年も来る？」このひとこと，これを聞けたのが一番嬉しい。日がたつほどに，いろんな人に何度も聞かれた。私は言った。「来たいけれども，来年は無理。モンゴルに来るのはとってもお金がかかるから。」「何に，どのくらいかかるのか？」一瞬，ためらった。しかし，往復17万円の航空運賃のことを話し，それから，アリゲルマーのサインと明細の書かれたフィールドノートのページを見せた。彼らはびっくり仰天した「200ドル！　そんなに払ったのか？　何のために？　生活費だって？　我々は24ドルだけ渡された。マリ，アリゲルマーは悪人だ。どうだ？」「うーん，わからないな。」本当にわからなかった。

草原のボヤント一家

私に同じ鍋の飯を食べさせてくれたボヤント一家は，女の子がいっぱいでにぎやかな，３世代の大家族だ。私はボヤント父さんの７人目の子どもとして，20歳になる次女ガラと同輩感覚で，５人の弟妹を従えて遊牧家族に加わった。草原の暮らしのなかでは，世代と年齢の上下による秩序が守られている。３歳の子どもも敬語をちゃんとわきまえている。

写真１　ボヤント一家13人の住む３つの移動式住居「ゲル」。1994年の夏営地バディン・ゴルにて。

ボヤント一家の夏営地 "バディン・ゴル"



住居は，両親・長女夫婦・次女夫婦の各々の世帯のゲルと，倉庫も兼ねた調理専用の小さめのゲルの四つがあり，弟妹たちはこの四つに分かれて寝起きする。夏の間，両親は郡中心の県道沿いでゴアンズ（食堂）をやっていた。祖母は郡中心に固定家屋とゲルとをもっていて，夏休みだけ草原に帰る。学校期間中，下の３人の娘たちは，このおばあちゃんの

家から学校に通う。

もうすぐ，9月。モンゴルの学校の新年度だ。92年以降，経済の混乱に乗じて牧民の子供の多く学校をやめ，国の予算不足のため閉鎖された地方学校もある。しかし，ボヤント家の妹たちは，ウキウキと学用品を揃えて準備している。

12歳のモンフに「学校，好き？」と聞くと，元気よく，「うん，好き。ねえ，マリの学校の親友はだあれ？」と言う。「まいこ，というの。彼女はイタリアが大好きで，今，イタリアにいるんだよ。」といいながら，辞書の国名一覧表の「イタリア（イタリと書いてある)」のところを指さした。「モンフ，あんたの親友は何ていうの？」すると，無言で辞書の「エチオピア（アビシンと書いてある)」を指さした。「アビシンちゃん？？」「うん。」「じゃあ，アビシンちゃんは何が好きなの？」モンフは，きらきらする目で私をじっと見つめ，自分の胸を指さした。

モンフの一つ下のオトゴンは，遊んでいても子守りをしていても，いつも腰をくねくねさせながら歌って踊る。「マリ姉ちゃん，日本の歌を踊ってー。」と叫んで，踊りながらやってくる。兄さんたちだって歌は大好きで，毎日，ゲームをしながらいくつもの民謡を朗々と唱いあげる。しかし，オトゴンの歌う「学校でならった歌」は，こぶしのきいた流行歌みたいで不気味だ。彼女はモンフとともに，朝から晩まで洋服をくるくると着替えたり，大きなイヤリングをつけたり取ったり，草原に都会の風を吹かせている。

この一家の収入源は畜産物だった。夏中，乳や乳製品を郡中心に持っていったり，町の人が来たときに売ったり。また，両親のゴアンズでは，自家製の肉と乳製品に，店で買った茶と小麦粉も使った料理をだしている。しかし，一番の稼ぎは初秋の家畜売却で，ボヤント家の4種類の家畜はそれぞれ，ウマは一頭1万円弱，牛は7000円弱，ヒツジとヤギは2000円ぐらいで売れるという。草原の生活でも，もちろんお金が欲しい。

食べ物だって自給自足ではない。熱々の塩味ミルク・ティーは冷え込む朝の食事に欠かせないが，中国・ロシアからの輸入の茶を買っている。服だって，作業着用の民族衣装をぱっと脱げば，おしゃれな新しい洋服をあれこれ着替えたい。服も化粧もばっちりきめた商人が，車に新しい服を満載してウランバートルからやってきて，草原のゲルを巡回し，購買意欲をかき立てる。ロシア人はダブルデッキを売りに来る。電気も水道もない草原のゲルにダブルデッキが来たあの日のことは忘れられない。子どもが学校に行けば，教科書をはじめとする学用品や町での生活用品が必要になる。インフレが激しく，教科書でさえも1年間で7倍の値段になる国で，誰でももっとお金が欲しいのだ。

◎ 草原周遊

迎えの車がやってきた

遠くからエンジン音が近づいてくる。どんな車か，誰が来るのか，大きな双眼鏡をかわるがわる覗いて，遊牧民はエンジンの音に敏感だ。隣家まで2キロもある人口希薄地帯では，訪問者はいつでも新しいモノやニュース，都会の風を運んできてくれる。

「バトだ！」青いワゴンが私たちのゲルの前でぴたりと止まり，見覚えのある顔が次々下りてきた。あれー，今日だったか。草原ボケしていた。やり残していることがまだいっぱいある。地図づくり，親戚関係の整理，子どもの仕事についてのインタビュー……。頭の中は混乱しながらも，私は茶碗洗いの最中だった。「マリ，元気か。茶碗洗いなんかして，すっかりモンゴル人じゃないか。馬乳酒，飲んだか。ウマには乗ったか。搾乳したか。草原の生活はどうだ？」「うん，うん。全部やった。ここはサイコーだ。」あれ，知らない2人の青年が一緒だ。「だれ？」

「日本人のYとNだ。」彼らもやはり，ナランさんを探しあてて草原へやってきたのだ。私の1週間後にウランバートルに着き，3週間モンゴルに滞在して観光地を車で回る計画だった。2日かけてキャンプしながらここまで来て，明日はカラコルムの遺跡に行く予定だという。

ちょっと待って。明日，私はゴビに飛ぶはずだ。すると，バトがいう。「ゴビにはいけない。15日に研究所に行く人はいなかった。空港から研究所までヒッチハイクで行くなんて，強盗に襲われる。私が警察に行って外国人滞在届けを出したのだから，何かあったら私が責任を問われる。小さな子どもを一人で行かせることはできない。だから，航空券も買わなかった。私たちと一緒にカラコルムに行こう。」私には，遺跡よりも，生きている人々の生活のほうがずっとおもしろい。でも，ゴビ砂漠のラクダ遊牧民のところには，もういけない。ならば，ここにもっといたい。遊牧民の生活を見るためにモンゴルに来たのだから。

私はボヤント家のみんなに尋ねた。「私はあなた達とここの生活が大好きだから，ここにもう少しいたい。できるかしら？」考えもせずみんながウンウンとうなずく。いつも，「14日に迎えが来ても帰さない。マリはここの家の子どもになるんだから」といっていた仲良しのガラは，このときも「いいよ。いなよ」と言う。ある日突然飛び込んできた居候を迷わず受け入れてくれるボヤント一家がますます大好きになり，「仕事もことばも覚えるぞー。そして，少しでもここで役立つ人間になるぞ」と決意した。

ところが，バトとダムディンスレンが，カラコルムに行こうと強硬に私を誘う。モンゴルの歴史遺産をどうしても私に見せたいらしい。3日間キャンプしながら，まずはカラコルム，次に僧侶が修行する渓谷フグン・ハーン，さいごに鳥取砂丘みたいな小砂漠バヤン・ゴビを巡るモンゴル観光周遊ツアーの決定版を企画している。しかも，そのあとで私をもう一度ボヤント一家に預けて，後日，再び迎えに来てくれるという。

これは嬉しい！　バトと話していると，アリゲルマーがやってきた。追加料金を払えと言う。延長日数分の草原での生活費も。あきれた。私はアリゲルマー一家に言った。「もう，いいです。バトさんとアリゲルマーさんに，もう世話はかけません。ボヤント父さんが，いてもいい，というので，私はここに残ります。私は草原の生活が大好きなのに，ゴビに行けないのだったら，24日までここにいさせて下さい。」「マリは本当に草原の生活が好きなんだなあ。いいよ，すきな日に迎えに来るよ。それより，カラコルムは本当にいいところだ。日本人YとNが行くから，ついでに連れていってあげるよ。金はいい。おまえはタダだ」バトがいうのを聞いたアリゲルマーは，怒り爆発でどこかへいってしまった。YとNと話してみると，モンゴルの観光地を車で案内してもらう約束で，一人1350ドルを払っていた。どひゃー！　アリゲルマー一家は一夏で3人の日本人学生から合計約3200ドルを得ていたのだ。

この国では，約4000ドル，つまり40数万円で，首都に3 DKのマンションが買えるという。学生の私がアルバイトで稼いだ金は，海を越えてちょっと先のモンゴルに一歩入ったとたんに，とてつもなく重く巨大な意味を背負ってしまった。

草原のオートキャンプ

ともかくも，楽しい観光旅行がはじまった。車中，Y，N，バトの3人は『恋の季節』を歌いまくって，尋常でないハッピーさだ。トイレ休憩のために車が止まった。といっても，見渡すかぎりの草原ではどんなに遠くにいってもマル見え。女は2人だけなので，機嫌を直したアリゲルマーがトイレに誘ってきた。並んで用を済ませて車に戻ると，彼女はでかい声で言うのだ。「この旅行はおまえはタダだけど，あの二人の日本人はすごーくたくさんの金を払っているのよ（と言いながら，人差指と親指をこすりあわせる「お金」のゼスチャーをする）。おまえは特別なん

だから。このことはあの二人には絶対に内緒よ。わかった？」「はあ」彼女はもう一度，念を押してロシア語で繰り返した。私の蒙・露会話力は哀れなものだった。だがそれ以上に，ＹとＮは私たちのやりとりをぜーんぜん解さなかった。私は確信をもって訴えます。「コトバがつうじなくても，キモチは通じる。最高の笑顔と精一杯のボディー・ランゲージで，世界中の誰でもみんな友だち！」なんてウソです。珍しい外国人と出会って興奮していれば，誤解しあっていてもゲラゲラ笑える。でも，同じ日本語をしゃべっていても恋人たちは日々別れているのだ。コトバが通じなければ，オトナの人間同士の意味のある関係は結べるわけがない。笑顔はマクドナルドでだってタダ。０円のスマイルを振りまきながら，身ぶり手振りでモンゴルと日本の相異を発見しあうのは，確かに楽しいコミュニケーションだ。

「日本にコレある？（ナベを指さして）」「ある。」「ふーん。日本のナベはイイ？　ワルイ？（親指を立てたら最高，反対に小指だけを出したら最悪を意味するモンゴル流の手のエンブレムを示しながら）」11歳の妹とのわけの分からないやりとりには思わず笑ってしまうが，こんな会話は３日で十分。11歳の女の子はちゃんと話のできるオトナのはずだ。時折，私たちのゲルに遊びに来る16歳の青年に意味ありげなサービスや挑発を仕掛ける彼女と，女の人生について，とくと話がしたい！　モンゴル語オンリーの16日間のホームステイ中，ずっと思っていたのは「ふつうの会話がしたい」ということ。一日本人と一モンゴル人との会話ではなくて，年相応の人間同士のふつうのおしゃべりがしたい。私の好きなボヤント家の５人娘たちと，学校のこと，将来のこと，結婚のこと……を話し合う友だちになりたい。

３日間の私たちの車旅行は，徹底的にキャンプ生活だった。自動車道路地図には郡ごとにホテルが書いてあるが，一度も泊まらなかった。「高い」そうだ。食事もゴアンズでは一度も食べなかった。私たちの車

には８人分の食料が５日分積んであった。肉も５日分がビニール袋にはいっていた。

夜８時半，日没近い夕日の道を走っていた。あ，ヒッチハイカーだ。12歳くらいの少年と20代後半の男が大荷物を背負い，草原の真ん中を貫く砂埃の道を歩いていた。車が止まると，旅人はものすごく嬉しそうに「やあー，元気かい」と親戚に出会ったかのようにバトの腕や肩をたたいた。電気もなく，車もめったに通らない夜の道を何時間も歩き続ける運命から救われるのだ。しばらく話し合ったあと，２人は車に乗り込んだ。旅人は軽口をたたいてみんなを笑わせる。２時間ほど走ったところから，この新しい道連れの指示で県道を外れて草っぱらを突き進んだ。前方に見えるゲルから女と子どもが出てきたのが，車のライトに照らし出される。車が止まり，私たちはゲルの中に案内された。彼の家だった。茶と乳製品でひととおりの歓迎を受けた後，私たちはいつものようにテントを張り，食事の準備を始めた。日没と共に寝て，日の出直後に起きる草原時間に順応していた私は，すでにこの時間には朦朧としていて食事どころではなかった。しかし，この道中，なぜか私はバトの息子のベヘーと共に，小間使のような役回りで，ＹとＮとが遊んでいる間に食事の仕度をし，朝は一番に起きて前夜の全員の食器洗いをする習慣になっていたので，このときも半眠状態で野営と食事の準備をしていた。翌朝も，いつもどおり一番に起きて川辺で食器を洗っていると，やはり洗い物に来ていた牧民の女の子が話しかけてきた。「モンゴル語，わかる？」「うん。」「年，いくつ？」「21歳。」「本当！　一緒だ。」昨夜の旅人のつれあいだという彼女は，私の学校のことなど根ほり葉ほり聞きながら，私を家に招いてお茶や搾りたての牛乳を飲ませてくれた。

ある日，ベヘーと２人で川にいってイモ洗いをしていた時，彼にきいてみた。「この旅行中と，ウランバートルを案内してくれた５日間のあいだ，バトはあんたに日当を払っているの？」彼はしばらく黙っていた。

写真2　朝8時，搾乳が終わり，母牛の群を南東の牧地へ追いたてるオトゴンジャルガル(11)。

英語の質問を理解し，答えを英作文する時間がいつも2分くらい必要なのだ。彼は，「ヤワゲチ」と低い声でいった。「？」ロシア語か英語の言い方を知らないか，ときくと，1分ぐらいして「知らない」と答えた。あとで調べたら，なんでそんなこと，という意味だった。愕然とした。彼は英語でもロシア語でも言えるはずだった。はじめに契約するとき，アリゲルマーが「通訳の料金は……」と言っていたので，ウランバートルでは彼を有料ガイドとしていいように使っていたが，彼はただ，日本に興味があって，日本人と友だちになりたかったのだ。それから「親孝行のため」とも言っていた。彼の母親はアリゲルマーではなく，複雑な家庭だった。

◎ 異文化体験の奥深さ

ボヤント一家と再会

3日間のツアーが終わって，ボヤント一家のもとへ戻った。これから8日間ここにいられる。バトたちと一緒にゲルにはいると，妹たちが照れくさそうにチラチラと私を見やる。12歳のモンフトヤが私の横を通り

すがりざまに小声で「マ・リ」。私も小声で「モ・ン・フ」と言い返す。ああ，これこれ，この感じ。誰も大声で歓迎を叫んだりしない。でも，一人ひとりが仕事の手を休めては，チラッと私を見る。ここでは，誰にも特別あつかいされないから，いやすい。バトたちをもてなすための馬乳酒が注がれる。私は彼らから離れ，妹たちがくっついて座っている右側のベッドにギュッとお尻をつめこんだ。

しかし，この8日間はしんどかった。先週は見るものすべてが珍しくて，一刻一秒が感動の嵐で大忙しだったのだが，落ちついてみるとけっこう暇だ。太陽の高くなる昼の5時間ほどは誰も働かず，大人はみんな寝てしまう。来客はよく来るけれども，隣家は2キロ以上離れているので，家族以外のだれにも会わない日も多い。草原の暮らしとは，遊牧世帯のメンバー一人ひとりが，家畜に関する仕事の担当部分をルーチンに，しかし一日も忘れずに繰り返すことの積み重ねだったのだ。それもそのはず，京都での日常生活がいつも平凡なのに，モンゴルがいつもセンセーショナルなわけがない。モンゴル人の毎日は，私の毎日と同じように「ふつう」なのであって，そんな日常のなかでやっぱり私と同じように，楽しかったり，怒り狂ったり，悲しかったりするコトが起こるのだ。

コトは，日常の時間のなかにスルリとすべりこむ。ガラが，弟と一緒に馬の搾乳をしている途中に，突然，「イヒヒヒーン！」と弟に飛び蹴りをかけた。弟も「イヒヒヒーン！」こうなったら，もう，私たち全員，馬だ。さて，それでもなんとか今日の搾乳はすべて終った。ゲルにミルク・バケツを置きにいく。姉さんは，バケツを置いたその手を静かに広げ，両腕を高く持ち上げてゆっくりと羽ばたき始める。鷲の羽ばたきは，勝者の示威だ。姉さんは，鷲の羽ばたきで弟や姉のつれあいを挑発する。弟が羽ばたきで応えた。さあ，モンゴル相撲のはじまり，はじまり。妹たちは熊手を振り回してキイキイいって姉さんを応援し，近所の少年は男側に加勢する。年寄りたちは即席桟敷席をもうけてゆっくり見物。

草原での生活にもやがて終わりが近づいた。しかし，私は，未だ果たされぬ悲願を残していた。馬に乗って山に行きたい！　男たちが暇で，機嫌のよいときをねらって何度も頼んだが，みんな面倒くさがって，うんとは言わない。この家の女は，とくに大人になると，乗れるはずなのに「乗れないよー」といって，決して馬に乗ろうとしない。YとNが来たときには「さあ，乗れ」といって，乗馬は初めてという２人を馬上に乗せて草原に放り出したのに，私には「落ちる」「女だから」といって乗せない。このときほど，「男に生まれていたら！」と思ったことはない。なんとしてもあの青々とした山に近づきたい。私たちの草原を囲んでいる，なだらかな山地の向こう側の世界はどうなっているんだ？　見たい。見たい。見てみたい。しかし，毎日はぐらかされていた。

24日，最後の日だ。山に行きたい。でも，迎えは何時に来るかわからない。私は焦った。それにしても，今日に限って男たちは忙しそうだ。おばあちゃんが言う。「来年来るときは，日本のアメを持ち上げられないほどたくさん（おばあちゃんは，ウーンとうなって両腕にひとかかえもある大荷物を持ち上げる格好をして）持ってくるんだよ」といった。アメや砂糖は大人も子どももみんな大好きだ。おばあちゃんにはよく怒られたが，また来いといってくれる。馬は来年にとっておこうかな，とも思う。

写真３　井戸で水くみの手伝いをする子どもたち。左より，オトゴンジャルガル(11)。ガナ(５)，ムンフエルデネ(８)，バトツェツェク(５)，隣家の母親ツェレンドラム。

今は，慢性的な飢餓感のために，野菜と果物の入った日本の料理を一刻も早く食べたくて，草原に一生住みたいとは全然思わない。

ついに来た。迎えの車が。私が寝起きしているゲルの主セルグレンが言う。「マリ，車が来たぞ」「セルグレン，馬に乗って山に行こう！」「いつ？」「今だよ」私は必死だった。「よし，わかった。行こう」アリゲルマーの親戚一同が車からゾロゾロ降りてきた。彼らの車はいつも便乗者でいっぱいだ。「マリ，元気か。さあ，帰ろう」と言うバトにお願いして，最後の猶予をもらった。

セルグレンと私は馬にまたがり，歩き始める。「チョウッ！」のかけごえで尻をたたくと走り出した。馬はちっとも楽じゃない。鐙に足をつっぱって直立していないと，馬の上でゴムマリみたいに飛び跳ねて止まらない。30分もすると「ひー」といいたくなるが，がんばる。馬は山を登り始めた。息を切らしながら一歩一歩，瓦礫を踏み進む。ついた。頂上，終点だ。馬も助かったし，私も助かった。スゴイ，大文字山くらいの小さい丘だが，ここから見える世界は今朝までの私の世界の10倍はある。心の底から溜息がもれた。「セルグレン，でっかいね」「いや，小さいよ」　彼は草原の男だった。井戸，川，冬営予定地，冬の避難場所，木の実のとれる場所……すべてを知り尽くした彼の舞台は私の想像をはるかに超えて広がっていた。

さいごに

モンゴルの短く輝く夏の季節には，日本の学者，学生，国際交流，観光ツアーにバックパッカー……毎日毎日やってくる。いろんな肩書きで来るけれど，あの真っ蒼な空の下，我々みんな，ただの「旅人」。モンゴルの草原に魅せられてやってきて，馬乳酒飲んで，ヒツジをほふり，民謡うたって，馬にのる。帰りの空港で出会ったバックパッカーは，かつて旅先で知り合った人からもらった「ウランバートルに住む友人の電

話番号」だけを便りに，日本からの船と汽車の片道切符を握りしめてウランバートル駅に降り立った。出会いを求めてやってくれば，どこにだっていろんな出会いが待ち受けている。新しい友だちができて，山にでかけたり，牧民のゲルで大歓迎のご馳走をふるまわれたり，ラッキーで幸せな「彼女のモンゴル」を体いっぱいに感じていた。やがて空港には，良い服を着た人々が添乗員に引率されてゾロゾロとやってきた。日本人は服でわかる。生地がいい。彼らの10日間のツアーにも，草原のゲルでの宿泊と，乗馬体験が組み込まれていたはず。彼らはみんなニコニコ顔だ。

モンゴルを旅する我々は，日本での日常生活から離れた「憧憬のモンゴル」に飛び込んで，限られた「旅」の時間を精いっぱい生きる。だけどモンゴル遊牧民は，おとぎの国の妖精じゃない。世界一の経済大国から続々とつめかける訪問者を横目に見ながら，日々の生活を生きぬいているのだ。お金をめぐる，「一日本人」と「十数人のモンゴル人たち」との関係は，不運なアクシデントではなくて，いつでもどこでも，あなたにもおこること。日本人がモンゴルを旅することの意味をもう一度考えるようにヒントをくれた，たくさんのモンゴルの「先生」たちとのかけがえのない出会いの数々——これが私の「フィールドワーク」。

本文に登場する人物は，一部をのぞき，仮名になっています。最後になりましたが，京都での準備から家に帰り着くまでの，私のあやうい「フィールドワーク」を支えて下さったすべての方々に感謝いたします。

編者紹介

山田　勇(やまだ　いさむ)

1943年生まれ。京都大学農学部卒業。
現在　京都大学東南アジア研究センター教授。
専攻　熱帯生態学・地域研究。
著書　『東南アジアの熱帯多雨林世界』創文社 1991年。
『熱帯雨林を考える』人文書院 1992年（共編著）。
Vegetation Science in Forestry, Kluwer 1995年（共編著）。
『森と人の対話』人文書院 1996年（編著）。

フィールドワーク最前線——見る・聞く・歩く——

平成8年10月15日　初版1刷発行
(1996)

© 編者 山田　勇

発行者 鯉淵 年祐

株式会社 弘文堂
101 東京都千代田区神田駿河台1の7
TEL 03(3294)4801
振替 00120-6-53909

ISBN4-335-56089-3
Printed in Japan.
印刷 平河工業社
製本 井上製本所